岐阜大発

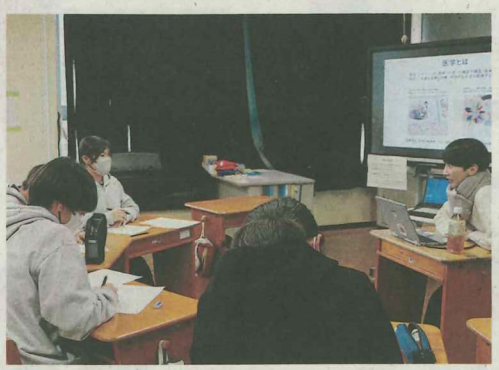
高橋美裕希さん

医療と教育 ともにつくる

高山で地域に根差す新たな形の講座

1週間のうち、月火曜日は高山市で診療や教育活動を行い、水木金曜日は岐阜大で医学生に授業をしています。そんな働き方を2年半続けてきました。大学と地域を行き来する中で、医療の新しい形が少しずつ見えてきた気がしています。

地域医療の新たな形を目指す「地域共創型飛騨高山医療者教育学講座（ともつく）」が設置されたのは2024年4月。高山市は東京都とほぼ同じ面積で人口は約8万1千人。救急医療を担う病院が二つある市の中心部と、高齢化が進んだ小さな集落が点在する周辺部があります。どこに住んでいても安心して医療を受けてもらうにはどうすればいいのか。地域が抱える課題に、大学も一緒になって向き合う取り組みです。



中学校で地域医療について授業する筆者㊨＝高山市で（筆者提供）

かつて、愛知医科大病院で研修医教育に携わっていたとき、社会人大学院生として岐阜大で医療者教育学を学んでいました。そこで「ともつく」の構想を知りました。地域に医師を派遣するだけでなく、教育や研究をする人が集まって、新しい医療と教育を「地域とともにつくる」という発想が面白いと思い、専任教員になりました。

高山に通うようになって、人口減少地域の医療に対する認識も大きく変わりました。以前は大変で厳しいというイメージもありましたが、地域に入ってみると医療現場や行政の人たちが住民を支えるために一生懸命に取り組み、住民も惜しみなく協力していました。地域の課題に向き合う人たちの姿を知り、外から見ているだけでは分からなかった地域医療のあり方に気付かされました。

「ともつく」では、医療従事者の教育だけでなく、地元の中高生への出前授業や市民公開講座、国際交流にも取り組んでいます。また、岐阜大の医学生が地域の課題を研究する活動も行っています。「ともつく」の研究室に集う学生たちは、高山市が25年に運用を始めた医療MaaS（移動診療車）に着目しました。看護師が車で地域に赴き、オンラインで診療所の医師と患者をつなぐ仕組みです。学生たちは医療MaaSの意義や稼働状況、関わる人の思いを調べ、研究成果を地域の学会で発表しています。

人口減少時代の地域医療の課題に、これが正解だと言い切れる解決策はまだありません。だからこそ、現場で頑張っている人たちをつなぎ、新しい取り組みを研究や教育で支えることが、私たちの役割だと思っています。

高山で診療し、地域の人たちから得た気付きや価値観を大学で学生に伝える。最近は地域の人たちが岐阜大を訪れてくれることも多くなりました。地域と大学の行き来から生まれる信頼関係を基盤に、地域で働く人の希望にもなるような仕事を続けていきたいと思っています。

（構成・平子宗太郎）



たかはし・みゆき　岐阜大地域共創型飛騨高山医療者教育学講座（ともつく）特任准教授。専門は医学教育学、内科学。医学博士、医療者教育学修士。